

# メチェ語調査ノート

桐 生 和 幸

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第49号抜刷）

報告・資料

## メチェ語調査ノート\*

### A Research Note on the Meche Language

桐 生 和 幸

#### 1 はじめに

本稿は、平成15年8月に東ネパール・ジャパ地区・ダイジャン村、および、その後、カトマンズのメチェ語話者の協力を得て行ったメチェ語に関する予備調査(のべ16時間)で判明したことを報告するものである。今回の聞き取り調査では、ダイジャン村の20代の男性1名、30代の男性1名、および、80代の男性1名、それに加えて、カトマンズ在住の20代の男性1名を対象に動詞、テンス・アスペクト、類別詞、疑問詞、文法関係、使役、否定についての調査を行なった。

メチェ語は、ネパール南東部、ジャパ地区で話されているチベット・ビルマ語派、ボド語支の言語で、2002年のネパール国勢調査によると、話者数は3001名である。メチェ語の話されている地域は、東ネパールジャパ地区のダイジャン、ジャルタルなどで、メチ河よりも東に位置する。メチェ語は、インドのアッサム地方で話されているボド語(または、ボロ語)と同系統の言語で、メチェ語の話者によると、ボド語とは意思疎通が可能で、それほど遠くない方言的な関係にあるといえる。ボド語との差は、語彙における音声的バリエーション、文法語の形態差が見られるようである<sup>1</sup>。

ボド語に関しては、Hodgson (1880) にコフ語、ディマール語を含めた対照的な考察が見られ、また、その他、筆者はまだ入手していないが、Bhattacharya が博士論文でボド語に関しての記述論文を書いているようである。日本人の手によるものとしては、長野(1992)がボド語を簡単にまとめたものがある。一方、メチェ語に付いては、Narjinari (1985) が、社会的

な観点からメチェ族の社会、文化、言語について書いたものと、Battarai (1999) によるネパール語-メチェ語の語彙集があるのみで、メチェ語に関する文法書はいまだに存在していない<sup>2</sup>。

近親のボド語は、話者人口が20万以上おり、また、民族意識も高く、ボド族の自治もインド内では認められているようである。その一方、メチェ語は、ネパール国内では、少数であり、メチェ族の中では、特に、民族的な権利を求めた運動などは行なわれていないし、メチェ語による教育も行なわれていない。今回の調査地のメチェ語の使用状況を見ると、家庭によっては、子供がメチェ語を理解できるものの話すことができず、ネパール語で親と会話をするという家庭も見られた。ネパールでは、ネパール語による教育が普及しており、子供が母語を話せなくなるという状況が、どの言語でも起こっている。また、30代の話者も、ほとんどがネパール語による教育を受けており、メチェ語の使用可能語彙が80代の話者と比べて制限されつつある状況が、特に、類別詞の使用を調べているときに感じられた。この状況の中、メチェ語の話者数の少なから、将来、絶滅の危機に瀕する言語としてリストにあがる日もそう遠くはないように思われる。それゆえ、現在、まだ十分に話者がいる間に、語彙や文法などの調査を十分に行なう必要があり、特に、ネパール人の手による研究が望まれるが、今のところ、メチェ語を調査しているネパールの研究者はいない。

## 2 メチエ語の特徴

本節では、メチエ語の文法的な特徴について、各文法範疇ごとにまとめていくこととする。

### 2.1 メチエ語の音声

今回の調査の範囲で判明したメチエ語の音声体系は、以下のようにまとめることができる。

#### 2.1.1 母音

	前	中	後
高	i		ɯ u
中	e	ə	o
低		a	

表1：メチエ語の母音

メチエ語の単母音は、表1のように8つの母音が認められる。特に、後舌高母音では、円唇と非円唇の区別が見られる<sup>3</sup>。二重母音としては、/əu/, /əi/, /ai/, /ia/の4種類が認められる。また、母音の長短の区別は、今回の調査の範囲内では、認められなかったが、語幹が単音節の場合、単母音が長音として発音される傾向がある。

母音の後に、はっきりと声門閉鎖音が続くことがある。例えば、「魚」はnaʔと発音され、後に別の言葉が続くときには、声門閉鎖音がはっきりと聞き取ることができる。しかし、声門閉鎖音の有無が弁別的な特徴として働いているのかは、今回の調査では、調べていない。

#### 2.1.2 子音

	両唇	歯音	歯茎音	硬口蓋	軟口蓋	声門
破裂音	ph b	th d			kh g	
摩擦音			s			h
鼻音	m	n			ŋ	
破擦音			ch j	sh		
流音	w	l		y		
弾音			r			

表2：メチエ語の子音

メチエ語の子音は、表2のような体系を持つ。ネパール語やその他のチベット・ビルマ語では、有気音は、同じ調音点の無気音子音と対立する音素として存在することが多いが、メチエ語では、有気音の無声子音が存在するものの、対立する無気音のとの弁別的な差は存在せず、有声子音であれば無気音であり、無

声子音であれば、有気音になるという特徴が存在する。また、軟口蓋の鼻音/ŋ/は、TB言語のチベット語派の言語では語頭に現れることがあるが、メチエ語では語頭に現れることはないようである。また、反り舌音が若い人の中で観察されたが、80歳の高齢者の発話には、まったく見られなかったので、おそらく、ネパール語からの影響であろうと思われる。

#### 2.1.3 アクセント

メチエ語には、音節レベルの高低アクセントが認められる。アクセントの落ち方の特徴として、二音節の場合、「低高」というアクセントパターンと「高低」というパターンが認められる。今回の調査では、アクセントパターンの違いが弁別的に機能しているのかは、十分調べることができなかったが、多くの表現が「低高」というアクセントパターンをとるように感じられ、3音節以上の単語の場合、「高」アクセントが最後の音節になることが多い。そのことから、メチエ語では、最終音節が、「高」アクセントになるという分析が一部可能だと言える。

### 2.2 名詞と格

メチエ語の名詞は、物を指す普通名詞、人称代名詞、指示代名詞が認められる。人称代名詞には、以下のようなのを記録した。

(1)	1人称	2人称	3人称
単数	aŋ	nəŋ	bi
複数	jaŋ	nəŋcher	bicher

3人称の代名詞には、性による区別はない。

指示代名詞は、距離による三項対立で、近い場所を指すbe、中距離を指すbəi、遠距離を指すhobbeの3種類がある。これらが、話して・聞き手との関係で日本語のように使い分けは、今回調べた範囲では、存在しないようで、単純に距離の問題のようである。

#### 2.2.1 主格と対象格

人称代名詞と指示代名詞は、主語の場合、格が付かないが、普通名詞は、主格を表す接辞が付く。それに

対して、目的語の場合は、どちらの場合も -khəu という語尾が付く。

- (2) a. ram-ma                    nɛŋ-khəu    meche khətha  
 1sg.NOM/Ram-NOM    2sg-THM    Meche language  
 phərəŋ-ŋa  
 teach-PAST

私・ラムは、君にメチェ語を教えた。

主語の接辞は、形態的に -Ca であり、-C の部分は直前の音に逆行同化し変化する子音である。-C の部分の子音のバリエーションは、[w], [n], [y], [ŋ] が今回は記録され、子音がゼロになる場合もあった。以下に、名詞に主格をつけた例を示す。

- (3) a. hu-wa 畑, khibau-wa おしり,  
 thaijo-wa マンゴー, nau-wa 家  
 b. biskut-na ビスケット  
 c. na-ya 魚, ləgə-ya 友達  
 d. atheŋ-ŋa 足  
 e. bishajə-ʔa 娘  
 f. khələm-a ペン

この主格の働きは、今回の調査で判明した範囲では、普通名詞の他動詞主語の場合は、今回得られた例ではすべてついており、自動詞の場合は、付かない場合と付く場合とがあるようである<sup>4</sup>。

- (4) a. ram(-ma)            phei-bai  
 Ram(-NOM)    come-PFT  
 ラムは来ている。  
 b. ram-ma            haba            mau-dən  
 Ram-NOM        work            do-PROG  
 ラムは、仕事をしている。

主格の接辞は、名詞句全体の後に付くので、形容詞が後から修飾している場合、形容詞の後に付く。

- (5) choima bisha-ya    aŋkham    ja-dən  
 dog    small-NOM    rice            eat-PROG  
 小さい犬が米を食べている。

この主格は、コンピュータ文の場合にも現れている例が記録されている。しかし、肯定の場合、コンピュータは現れる例がなく、否定文、および、疑問文の場合にコンピュータが現れ、その主語には、主格が付くようである。

- (6) a. ram            bodo  
 Ram            Bodo  
 ラムはボドだ。  
 b. santhalal-ya    japanij    əŋga  
 Santhalal-NOM    Japanese    NEG.CPL  
 サンタルルは、日本人ではない。  
 c. hobbe    dəu-wa            chər-ni    thəʔ  
 that    chicken-NOM    who-GEN    Q.CPL  
 その鶏は誰のですか？

対象を表す -khou は、基本的に与格、対格の両方の機能を担う。

- (7) a. aŋ    buchula-khou    bichi-bai  
 1sg    shirt-THM            tear-PFT  
 僕は、シャツを破ってしまった。  
 b. be-khou    ənthai    buŋ-ŋa  
 this-THM    stone    call-PAST  
 これは、アンタイ（石）という。  
 c. ram-ma    aŋ-khou    meche khətha  
 Ram-NOM    1sg-THM    Meche language  
 phərəŋ-ŋa  
 teach-PAST  
 ラムは、僕にメチェ語を教えた。  
 d. aŋ    ram-ma-khou    haba    mau-hə-wa  
 1sg    Ram-NOM-THM    job    do-CAUS-PAST  
 私は、ラムに仕事をさせた。

(d) の例は使役文であるが、使役文の場合、埋め込み文の主語としての主格と非使役者としての対象格の両方が付与されている。このうち、主格は省略が可能である。

-khou は、原則目的語などに付くマーカーであるが、目的語であれば常に付くわけではない。次の例を見ると、定・不定というパラメータが -khou の出現を左右しているようである。

- (8) a. aŋ    be    naʔ-ya-khou    sithat-bai<sup>5</sup>  
 1sg    this    fish-NOM-ACC    kill-PAST  
 私は、この魚を殺した。  
 b. aŋ    naʔ    ma:-brai    sithat-bai  
 1sg    fish    CL-four    kill-PAST  
 私は、魚を 4 匹殺した。

(a) のように、指示詞beが付いた場合、特定の魚を指すことになり、この場合、-khouが必須になる。逆に、(b) のような場合、不特定の魚を指しており、この場合、-khouを付けることができない。

### 2. 2. 2 その他の格を表す接尾辞

今回確認できた格関係を表す接尾辞には、以下のようなものがある。

#### (9) a. 属格：-ni

ram-ni lægə ラムの友人

#### b. 随格・具格：-jən

ram-jən ラムと一緒に、  
biji-jən 針で

#### c. 起点：-niphrai, -niphran

japan-niphrai 日本から

#### d. 所格：-Cəu

nau-əu 家に・で、  
thala mannai-yəu 2階に

#### e. 到達点：-hai

baira-hai 外まで

### 2. 3 数詞と類別詞

Weidert (1984) には、ネパールにおける類別詞言語として、ネワール語以外に、メチェ語をあげており、メチェ語は、ネワール語と同様豊かな類別詞を持つ言語としている。Weidert自身は、この論文において、メチェ語がどの程度の類別詞を持つのかにはまったく言及していない。今回の調査において、メチェ語の類別詞として、以下のようなものが得られた。

- (10) a. man- 無生物を指す汎用類別詞  
b. sa:- 人を指す類別詞  
c. ma:- 動物を指す類別詞  
d. jora- 対のものを指す類別詞  
e. thai- 果物を指す類別詞  
f. phaŋ- 草木を指す類別詞  
g. tho:- 竹やとうもろこし  
h. pet?- 一欠けのもの(にんにく, みかん)  
i. gaŋ- 平たいもの(プレート, シャツ, ズボン, 紙, ござ)

- j. gog- 矢, 魚を捕まえる竹製の筒  
k. dəŋ- 首輪, 花輪, 弓  
l. thukura- 欠けた物  
m. go?- 粒状のもの(穀物, ゴマ, 種)  
n. dot?- 肉の一片  
o. ga:- 回数  
p. khap- 一杯

メチェ語の類別詞は、メチェ語の数字の前に付く形式を取るが、最近では、メチェ語の数字自体がネパール語に取って代わられてしまい、6以上の数字が付く場合、人の場合は、6以上は-janという類別詞(ネパール語のjanaが語源と見られる)に、対を表すものは、juriに取って代わられ、ネパール語の数字に付く。また、その他の人以外を指す類別詞はすべて-thaという接尾辞に変わり、ネパール語の数詞の後に付く<sup>6</sup>。

- (11) 物 人 動物 対
- |             |          |          |           |
|-------------|----------|----------|-----------|
| 1. man-che  | sa:-che  | ma:-che  | jora-che  |
| 2. man-nai  | sa:-nai  | ma:-nai  | jora-nai  |
| 3. man-tham | sa:-tham | ma:-tham | jora-tham |
| 4. mam-rəi  | sa:-brəi | ma:-brəi | jora-brəi |
| 5. mam-ba   | sa:-ba   | ma:-ba   | jora-ba   |
| 6. chəi-tha | chəi-jan | chəi-tha | chəi-juri |
| 7. sath-tha | sath-jan | sath-tha | sath-juri |
| 8. ath-tha  | ath-jan  | ath-tha  | ath-juri  |
| 9. nəu-tha  | nəu-jan  | nəu-tha  | nəu-juri  |
| 10. dəs-tha | dəs-jan  | dəs-tha  | dəs-juri  |

今回の調査では、30歳以下の若いメチェの人からは、(a) ~ (c) の3つの類別詞しか聞きだすことができなかったが、80歳の高齢者に再度尋ねてみたところ、(10) のような類別詞を聞きだすことができた。

### 2. 4 形容詞

メチェ語では、形容詞は、コピュラなしで述語になることができる。

- (12) aŋ-ni lɔgw məjan  
1sg-GEN friend good

私の友人は良い。

または、存在を表す動詞が付く例もある。

(13) a. santhi dongo  
quiet exist.PRES  
静かだ。

b. ba-hai-niphrai gəjan dongo  
this-LOC-ABL far exist.PRES  
ここからは遠い。

未確認であるが、(12)の例においても、存在動詞が付くことが可能と思われる。もし、すべての形容詞に存在動詞が付くのであれば、形容詞は、メチェ語では、名詞的な特徴が強いと言えるかもしれない。

形容詞が名詞を修飾する場合、形容詞は、名詞の後から修飾する。

(14) chingri shikhra  
girl young  
若い娘

メチェ語では、OVやGNやRel-Nと主要部が後置する語順が支配的であるが、形容詞のときのみ、NAと主要部が前置する語順となるのが特徴的である。

## 2.5 動詞

メチェ語の動詞は、語幹にさまざまなテンス・アスペクト・モダリティの接尾辞が付く。否定については、否定だけが独立した接辞では存在せず、テンス・アスペクト・モダリティを含んだ形で現れる。ちなみに、メチェ語の動詞は、主語の人称によって変化することはないようである。

### 2.5.1 テンスと否定

メチェ語のテンスは、現在、過去、未来を異なる接辞で表す。現在の習慣などは、-Cwという接辞で（Cは、子音）で表される。また、過去は-Caで、未来は、-naiで表される。しかし、否定の意味が絡んできた場合、-Ca形の用法は複雑に見える。

(15) a. samphrəmbə aŋ ciya ləŋ-ŋwɪ,  
everyday lsg tea drink-HAB  
tərə mia ləŋ-ŋi  
but yesterday drink-NEG.PAST  
毎日僕はお茶を飲む。しかし、昨日は飲まなかった。

b. gabən aŋ ciya ləŋ-nai, tərə  
tomorrow lsg tea drink-FUT but  
dənei ləŋ-ŋa

today drink-NEG.PRES  
明日僕は、お茶を飲む。しかし、明日は飲まない。

c. mia aŋ ciya ləŋ-ŋa, tərə  
yesterday lsg tea drink-PAST but  
gabən ləŋ-ŋa

tomorrow drink-NEG.FUT  
昨日僕はお茶を飲んだ。しかし、明日は飲まない。

d. samphrəmbə aŋ ciya ləŋ-ŋa,  
everyday lsg tea drink-NEG.HAB  
tərə mia ləŋ-ŋa

but yesterday drink-PAST  
毎日僕はお茶を飲まない。しかし、昨日は飲んだ。

(c)と(d)では、2度ともləŋ-ŋaという同じ形が使われているにもかかわらず、テンスと肯定否定の点で異なる使い方をしていることが分かる。テンスと肯定否定のパラダイムをまとめると以下ようになる。

(16)

	肯定	否定
未来	ləŋ-nai	ləŋ-ŋa
現在	ləŋ-ŋwɪ	ləŋ-ŋa
過去	ləŋ-ŋa	ləŋ-ŋi

つまり、メチェ語では、ləŋ-ŋaという単一の形式が、肯定にも否定にも使われることになる。そして、肯定になるか否定になるかは、過去vs.非過去という対立によって意味的に実現されることになる。つまり、過去の文脈であれば、肯定に、非過去の文脈であれば否定に解釈される。

その他、存在を表す動詞は、現在形がdongo、その否定がgəiɪyaとなり、形態的には、無関係に思われる。

強意の否定接辞としてtharaがある。これは、「まったく～ない」という意味を表し、習慣の否定といえる。また、存在動詞の否定にも付くことができ、-yaの部分と置き換わる。

(17) a. ram-ma curot chəp-thara  
 Ram-NOM cigarette smoke-never  
 ラムは、まったくタバコを吸わない。

b. kitab gəi-thara  
 Book exist.never  
 本がまったくない。

## 2. 5. 2 アスペクト

今回の調査では、進行、パーフェクト、未完了を表す接尾辞の例を記録した。進行中の動作を表す接尾辞は、-dəŋである。

(18) a. aŋ haba mau-dəŋ  
 1sg job do-PROG  
 私は、仕事をしている。

b. bæu-wa bairau thaŋ-dəŋ  
 grandfather-NOM outside go-PROG  
 おじいさんは、外へ行っている。

(18b)の例は、一時的に外へ行った状態にあるという解釈が成り立つ。

パーフェクトを表すのは、-baiという形式である。意味としては、現在の状況に影響を与えている過去の動作を表す働きをしている。よって、現在時とは切り離された過去の動作を表す場合には、用いることができない。

(19) a. ram-ma phul-niphra bajrum-bai  
 Ram-NOM bridge-ABL jump-PFT  
 ラムが橋から飛び降りたぞ。

b. \*mia aŋ chəi-bəji jikhaŋ-bai  
 yesterday 1sg six time wake.up-PFT  
 tərə dənəi jikhaŋ-ŋi  
 but today wake.up-NEG.PAST  
 昨日は僕は6時におきたが、今日は起きなかった。

c. mia bi sath-bəji jəu ləŋ-bai  
 yesterday 3sg seven-time liquor drink-PFT  
 khənə phe-bai  
 therefore drunk-PFT  
 昨日彼は7時に酒を飲んだ。だから、酔っ払った。

(19a)では、彼が橋から飛び降りたという事態が、現在と関連性を持っている場合にのみ可能である。よって、現在との関連性が確立できないような(19b)では、-baiを用いることはできないが、同じ昨日という文脈でも、酒を飲んで酔っ払っているという状態が現在まで及び、その場の状況に関係があれば、-baiを使ってあらわすことができる。

-baiと似た意味を表す形式として-nainiがある。この形式もパーフェクトを表すが、現在時に関係する過去の動作を取り立てて表現する-baiとは異なり、過去の動作の結果として、その効力が継続している、という意味でのパーフェクトを表す形式である。

(20) aŋ japan-niphrai phai-naini  
 1sg Japan-from come-PFT  
 私は、日本から来ています(しばらく経っている)。

未完了は、パーフェクトとはまったく異なる形式でメチェ語では表される。未完了を表す語尾は、-Ca+khəiという形式である。ここでは、「分かる」という意味のmithiの例を挙げる。

(21) a. mithi-bai 分かった。

b. mithi-ya khəi (まだ)分からない、分かっていない

その他、直前の動作を表す-nai-chəiを記録した。

(22) jaŋ thaŋ-nai-chəi  
 we go-FUT-IMM

私たち、行きますね。(帰りかけるときに)

## 2. 5. 3 モダリティ

モダリティに関係する接辞として、以下のようなものを記録した。

(23) a. 誘いかけ: -nathə  
 ciya ləŋ-nathə 'tea drink-HOR'  
 お茶を飲みましょう。

b. 命令: -də  
 tha:-də 'stay-IMP'  
 居てください。(その場に残る人への挨拶)

c. 否定命令: -le  
 haba mau-le 'job do-NEG.IMP'

仕事をやめなさい・やめよう。

## 2. 5. 4 コピュラ

メチェ語には、コンピュータ的に機能する言葉があるが、現在肯定文では、コンピュータは現れない。コンピュータが現れるのは、疑問文、否定文、過去、未来の場合である。

(24) a. ram bodo

Ram Bodo

ラムはボドだ。

b. ram bodo əŋja

Ram Bodo NEG.CPL

ラムは、ボドではない。

c. bahai tha:-naini mansi-ya aŋ-nji

here stay-PFT man-NOM 1sg-GEN

nokor mən

family CPL.PAST

ここに住んでいたのは、私の家族でした。

d. be kələm-ma dənəi aŋ-nji tərə

this pen-NOM today 1sg-GEN but

gabən bi-ni ja-naiʔ

tomorrow 3sg-GEN be-FUT.

このペンは、今日は僕のだが、明日は、彼のものになる。

## 2. 5. 5 使役

今回は、十分に調査をすることが出来なかったが、メチェ語では、音声対立、接頭辞、助動詞による自他対立と使役接辞による使役構文とがある。自他の対立で聞き取りをしたものは、以下ようになる。

(25) a. bai 折れる chi-phai 折る

b. ji:-bai 破れる bi-chi-bai 破る

c. gagli こぼれる khakhli こぼす

d. chi: 濡れる phi-chi 濡らす

e. thiliya-ja 曲がる thiliya-khəlam 曲げる

f. gə-mat 消える chik-mat 消す

g. thai 死ぬ si-that 殺す

このような形態的な自他対応については、幅広く動詞を見る必要があるが、この限られたデータの中での特徴をまとめると、まず第1に、(a) から (c) に見られるように自動詞で有声無気音であるものが、他動詞

では、無声有気音に変わっている (bai→phai, ji→chi, gagli→khakhli) という特徴がある。第2に、自動詞では付いていなかった接頭辞が他動詞に付く場合 (chi-, bi-, si-) がある。第3に語幹は同じで、自動詞と他動詞とで接頭辞が交替する (f) のような例もある。第4に、自動詞には変化を表すjaが付き、他動詞では、「する」という意味のkhəlamが付く (e) のようなパターンもある。

動詞の中には、自動詞と他動詞で形が同じになるものがある。今回記録できたのは, bigrai「壊れる・壊す」, thon「丸まる, 丸める」の二つであった。

典型的な他者使役を表すばいはいは、使役の接辞həが動詞の直後に付く。

(26) a. ram-ma haba mau-dəŋ

Ram-NOM work do-PROG

ラムが仕事をしている。

b. aŋ ram-ma-khou haba mau-hə-dəŋ

1sg Ram-NOM-THM work do-CAUS-PROG

私は、ラムに仕事をさせている。

この-hə使役は、典型的な使役の意味以外にも、次のような使い方が観察された。

(27) a. aŋ buchula gan-dəŋ

1sg shirt wear-PROG

私は服を着ている。

b. aŋ ram-ma-khou buchula

1sg Ram-NOM-THM shirt

gan-hə-dəŋ

wear-CAUS-PROG

私は、ラムに服を着せている・着させている。

この例では、他者使役の意味解釈もあるが、自分自身に対する動作と他人に対する動作とを区別するため、他人に向かう動作であることを使役接辞であらわしてるという解釈も成立する。このパターンを採る動詞は, dwgai「洗う」という動詞がある。この場合も、再帰的に主語が自分自身を洗う場合は、そのまま使うが、他人を洗うという場合には、使役接辞が付く。

次の例では、音声的な他動詞ペアを持つ動詞に使役接辞をつけている場合である。ここでは、「消える」



gəmatの例である。

(28) a. ram-ma batthi gəmat-hə-bai  
ram-NOM candle be.put.out-CAUS-PFT  
ラムがローソクを消してしまった。

b. ram-ma batthi chikhmat-bai  
ram-NOM candle put.out.CAUS-PFT  
ラムがローソクを消してしまった。

(b) は、単純に他動詞の形式であるが、(a) は、自動詞に使役接辞-həをつけたもので、統語的に使役になっている形式である。ここでの両者の違いは、はっきりと突き止めることが出来なかったが、(b) は単純な他動詞文であるのに対して、(a) の方は、主語が非1人称になり、その出来事を他人に伝えるときに使う、というインフォーマントの感想を得た\*。

### 3 まとめ

本稿では、2003年の夏に調査を行なったメチェ語の文法体系について、報告資料としてまとめた。大変短い期間だったため、細部まで細かく聞くことがまだできていない。今後、格や文法関係、使役や自他対応など、今回はまとめていない部分をさらに調べてまとめる予定でいる。メチェ語自体は、ボド語と近親関係にある言語であるが、ボド語に関する文献を入手し、ボド語との比較をしながら、メチェ語の文法的特徴を探る必要があることを痛感しているが、現時点では、ボド語関係の資料が、インドのアッサムへ行かなければ、手に入らないようなので、悩ましいところである。

\*本論文を作成するに当たり、メチェのインフォーマントの方々に感謝すると同時に、調査に同行し、ネパール語での聞き取りの手伝いをしてくれた松枝千富君に感謝の意を表したい。松枝君なくしては、今回の調査自体が成立しなかったと言っても過言ではない。本稿は、短い期間の調査によってまとめられたものであるため、言語事実の面で十分はっきりとしていない部分がある。本稿中の間違いは、当然著者の責に帰するものである。本稿で使用しているグロス記号は以下の通りである。

ABL—ablative, CAUS—causative, CL—classifier, CPL—copula, FUT—future, GEN—genitive, HAB—habitual, HOR—hortative, IMM—imminent future, LOC—locative, NEG—negative,

NOM—nominative, PAST—past, PFT—perfect, PRES—present, PROG—progressive, Q—question, sg—singular, THM—theme

- 1 ボド (Bodo) は、Hodgsonによって採用されたボド語支のカバータームである。Hodgsonは、アッサム地区のボド語の近親語としてMech, Kachari (Bara)などをあげている。
- 2 査読者より、van Driem (2001) *Languages of Himalayas*にもメチェ語に関する文献が挙げられているという指摘を受けた。現在手元にないので、今後の研究の参考として入手したいと思う。
- 3 メチェ語は、独自の文字を持たないが、メチェの人が書く場合、デヴァナガリ文字が用いられる。しかし、非円唇の/w/は、デヴァナガリ文字には存在しない音であるため、デヴァナガリで表記することが難しい。
- 4 ここで「主格」と呼んでいるものが、実際には、主格なのかどうか、はっきりしない。主格と言うよりも、主題を表しているようにも見受けられる節があり、この点については、今回の調査では、はっきりさせることができなかった。
- 5 na-ya-khouは、fish-NOM-THMと分析しているが、-yaの扱いが問題になるように思われる。この文自体は、他動詞文のような解釈になっているため、なぜ、ここに主格が現れるのかに答えなければならないが、一つの可能性は、sithatは、CAUS.dieという形態的な使役動詞として分析すると、(7d)の例のように、魚が埋め込み文の主語であると分析でき、そのため、主格が付いていると説明が可能である。自動詞「死ぬ」は、thaiであり、TB祖語の使役接頭辞\*s-が先頭についてCAUS.dieという使役動詞に変化したと考えることができるからである。もっとも、これは、推論の域を出ないし、また、なぜ、-khouが付かないときに-yaが出現しないのかを説明する必要があるかもしれない。
- 6 ネパール語の数6は、chəであるが、メチェ語では、cheiに変化する。
- 7 jaは、ここでは、「なる」という意味で使われているが、同じつづりでjaは、「食べる」という意味にもなる。形容詞の後にjaが付くことで、その状態への変化を表すことができるが、これが「食べる」と同じ単語なのか、同音異義語なのかの判断は現時点では資料不足でできないが、インフォーマントに同じかと尋ねると、同じ言葉だ、という返事だった。
- 8 ネワール語でも、語彙的な使役動詞は、対応する自動詞と音声的な対立をもつが、これらの自動詞に使役接辞をつけると、その事態を完全にコントロールするのではなく、間接的に関わっている、という解釈を生み出す用法がある (Kiryu (2002) 参照)。メチェ語でもそのような

状況で使われるのかを探ってみたが、今ひとつはっきりとしなかった。

#### 参考文献

- Bhattarai, Baratkumar (1999) *Meche Bhasaka Shabdavali* (*Vocabulary of Meche Language*), Central Department of Nepali, Tribhuvan University.
- Bista, Dor Bahadur (2000) *People of Nepal*, Ratna Pustak Bhandar, Kathmandu.
- Dahal, Janardan (2002) *A Study of the Meches*, MA thesis, Tribhuvan University.
- Hodgson, Brian Houghton (1880) *Miscellaneous Essays Relating to Indian Subjects*, reprinted from Asian Educational Services, New Delhi.
- Kiryu, Kazuyuki (2002) The functions of the causative suffix -k in Kathmandu Newar, 神戸言語学論叢 3 号, 1-9
- 長野泰彦 (1992) 「ボド語」『言語学大辞典』下巻 1, 1095-1097, 三省堂書店
- Narjinari, Hira Charan (1985) *In Search of Identity The Mech*.
- Weidert, Alfons K. (1984). The Classifier Construction of Newari and its Historical Southeast Asian Background. *Kailash: A Journal of Himalayan Studies*, 11.3-4, 185-210.